授業形態	講義	科目名	情報科学への招待Ⅰ	必選区分	必修
開講学科・学年	大情１年		受講者数	約 150 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み ☑ 意欲・関心を高める取組み ☐ 発言を促す取組み ☐ 時間外学習を促す取組み ☐ 学習態度を良くする取組み ☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	スマフォを使ったインタラクティブな授業を実践している。具体的には、スマフォを使った選択式のクイズやアンケートを授業中に行っている。学生がスマフォを使ってクイズやアンケートに答えることで、聞くだけの講義スタイルを脱却し、双方向型の授業を実現している。				
取組みの効果	学生の理解度が授業中に把握でき、授業を微調整することができる。また匿名であるため、学生もクイズ・アンケートに回答しやすく、「授業に参加している」という意識が高まる。				
今後の課題	スマフォで授業とは無関係なことをする学生への対処。				

授業形態	講義	科目名	現代生活学への招待	必選区分	必修
開講学科・学年	大情 1 年		受講者数	約 90 名	
最も力を入れた取り組みポイント	□ 理解を深める取組み ☑ 意欲・関心を高める取組み ☑ 発言を促す取組み □ 時間外学習を促す取組み □ 学習態度を良くする取組み ☑ その他（グループディスカッションへの参加、プレゼンテーションの練習　）				
どのような方法を取り入れたか	授業実施環境 ・180 名を 2 クラスに分けて、1 クラス約 90 名で実施した。 ・マルチメディア使用可能な普通教室を使用した。 授業方法 ①テーマに関する説明後、学生各自がそのテーマについて自分の考えをまとめ、自己分析データとして用紙に記入する。 ②学生個人の意見が明確になった後、グループ (4 人 1 グループ) によるディスカッションを行い、グループの意見をまとめ、用紙に記入する。 ③グループの意見を、全員の前でプレゼンテーションする。 ④個人の意見、及び、グループのディスカッションとプレゼンテーションから再度、個人の考えをまとめてレポートとして提出する。 ⑤上記①～④の方法を、3 テーマについて、実施した。 ⑥その他、プレゼンテーションの参考例に TED の視聴、また、テーマに関する DVD の視聴を行い、内容要約と意見・感想のレポート提出を課した。				
取組みの効果	・必修科目であり、学生自身の取り組む意欲はある程度見られたが、個人の考えを表現することや自己分析は非常に苦手であることがわかった。 ・少人数グループなので、グループディスカッションへの参加はほぼできていたが、机の配置等が変更できる教室であればグループディスカッションもしやすくなったと思われる。 ・プレゼンテーションはグループ数が多く、短時間だったので十分な効果は得られなかった。				
今後の課題	①学生個人の意見を明確に表現できる方法を考え、学習意欲・関心を高める。 ・身近なことに対する自分の意識に注意することや、他人との会話の中での自分の考えを認識するなど、日常的に自分の考え方を把握することを促す。 ・レポート作成による文章作成技術の練習を多くし、テーマに対する問題意識を高める。 ②プレゼンテーションの評価を学生に行わせ、効果的プレゼンテーションの方法を考えさせる。				

授業形態	講義	科目名	情報科学への招待Ⅱ	必選区分	必修
開講学科・学年	大情１年		受講者数	約 90 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☐ 理解を深める取組み ☑ 意欲・関心を高める取組み ☐ 発言を促す取組み ☐ 時間外学習を促す取組み ☑ 学習態度を良くする取組み ☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	次の５つの方法を取り入れた。（１）座席指定：隣が別のクラスになるように工夫した。また、学生の要望もあり、学期途中でもう一度席替えした。（２）記入空欄のあるプリント：本講義では不完全なプリントを使うことによって、授業を聴きながら、スライドに提示された項目を記入する習慣をつけさせ、授業に集中する方に仕向けた。（３）雑談の息抜き：授業途中で雑談を入れることによって、９０分間の聞く意欲を高めることがねらいである。ただし、ネタは授業にも少し関連あるものを計画的に挟んだ。（４）授業中に毎回、練習問題や小テストの時間を作った。聞くだけの活動に変化を与えるためである。（５）講義スライドが後から見られる安心感：μ Cam にコースを作り、講義が終了後にその単元のスライドをオンラインコースにアップした。このことは、欠席者のためだけでなく、授業中のちょっとした聞き逃しや記入漏れに対しても、後から補えるので、次の話に集中しやすくするためである。				
取組みの効果	まず、授業アンケートによる授業全体に対する反応は概ね良好である。特に、「私語がなくて集中しやすい」といったコメントもいくつか見られるなど、周りの雰囲気が良いと好評さが伺えた。これは（１）座席指定の効果に依るところが大きい。しかも、座席指定に対する不満はほとんど無かった。また、試験の成績も、全体としては良好に思われたことから、（２）～（４）の授業への意欲・関心をある程度引き出せたのではないだろうか。ただし、昨年度はカリキュラム改正後の初めての科目であるため、過去との比較はできない。（５）についても学生からのコメントは少しではあったが、効果があったことが伺えた。				
今後の課題	今回の取り組みでは、意欲・関心を高めるという点、および、学習態度を良くするという点では、一定の成果が得られたのではないかと思われる。しかし、プリントの余白スペースが小さい、など教材や提示技術の面でさらなる改良が必要と思われた。また、学生を授業に積極的に参加させるという点では、まだまだ不十分である。今後は、練習問題や課題を与えたときに、授業中に、直接答えさせたり、考えを発表させる時間を取り入れたいと考えている。				

授業形態	講義	科目名	視覚情報論	必選区分	選択
開講学科・学年	大情２年		受講者数	約 90 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☐ 理解を深める取組み				
	☑ 意欲・関心を高める取組み				
	☐ 発言を促す取組み				
	☑ 時間外学習を促す取組み				
	☐ 学習態度を良くする取組み				
	☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	視覚情報に関する知識を講義として学習するだけでなく、実習形式を取り入れて色と形についての自ら視覚情報を作成するほか、視覚情報が豊富に凝縮している自分の顔写真を題材としてフォトレタッチにより修正加工を施すなど、講義に積極的に参加する授業方法を取り入れている。				
取組みの効果	視覚情報素材として、自分の顔を仮想的にプチ整形することによって、ほんの少しの加工で大きく視覚情報が変わることを体験し、視覚情報の意義や効果についての関心を高めた。				
今後の課題	視覚情報素材として、他人の顔を加工すると、おもしろおかしい方向へ向かいがちであるが、自分の顔を題材にすることで、真剣に取り組むことができる。ただし、加工が上手にできていかない場合、嫌悪を感じる場合があるようなので、注意を要する。				

授業形態	講義	科目名	アルゴリズム論	必選区分	選択
開講学科・学年	大情２年		受講者数	約 80 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み				
	☑ 意欲・関心を高める取組み				
	☑ 発言を促す取組み				
	☑ 時間外学習を促す取組み				
	☑ 学習態度を良くする取組み				
	□ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	講義科目であるが、実習要素も多く含んでおり、PC 教室で実施している。このため、独自のブログボードを立ち上げ、それに対して学生にリアルタイムにメッセージを入力させている。教員は寄せられたメッセージを授業中に閲覧しながら学生の理解状況の参考にしている。 ブログボードに加えて、手書きのメッセージシートを用意して、毎回学生から質問や相談を受け付けている。これに対しては、次回授業時に回答するようにしている。 問題演習の実施にも独自の e-Learning システムを立ち上げて μ Cam と併用している。				
取組みの効果	学生の理解状態の把握はできている感触が得られている。授業の内容に直接関係のない、コメントやメッセージも多く寄せられるが、学生の心的状態に関する情報源にもなっている。				
今後の課題	e-Learning にコース管理を自動化する機能があると助かるが、これは容易ではなさそうである。				

授業形態	講義	科目名	消費者経済学	必選区分	選択
開講学科・学年	大情２年		受講者数	約 100 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み ☐ 意欲・関心を高める取組み ☐ 発言を促す取組み ☐ 時間外学習を促す取組み ☐ 学習態度を良くする取組み ☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	毎週、「日々のアンケート」と称するＡ４判の質問・感想アンケート票を配布し、質問欄には当日の授業でわかりにくかった部分について、具体的にどこが、どのようにわからないのかを全員に記名で書かせて回収し、翌週までにほぼすべての質問に対して詳細な解説をほどこし、感想にもコメントをつけ、再掲した質問文や感想文の筆者は匿名にしてμ Cam にアップロードした。授業で説明したことであっても、再度視点を変えたり説明の仕方を変えて詳細なコメントをつけるので、ときに１度に A4 判で 10 枚程度になることも少なくなかった。もともとはプリントを配布していたが、プリントアウトの手間、コピーの経費、配布する時間を惜しみ、すべてμ Cam を活用することに切り替えた。単純な方法だが、担当者の教育についての熱意、とくに前提知識に乏しい学生、理解の遅い学生などを底上げする熱意と膨大な時間を要する。ポイントは毎週必ず実施し、毎週必ずコメントを返すこと、それを質問者だけでなく受講者全員が見られるようにすること、授業で説明したでしょ？などと言わずに丁寧に説明を繰り返すことなどである。半期 15 回に一度の授業アンケートは具体的な授業の改善にはほとんど役に立たないとの認識からこうした方法を取り入れた。				
取組みの効果	この科目は、受講生の殆どが経済学に全く触れたことがなく、新聞も読まないことから、利息や利回り、単利・複利、可処分所得といった言葉だけでつまづき、最初は彼女らにとって外国語の授業のようなものである。おまけに入試に数学がないので、比例や分数、べき乗、グラフの読みとり、１次・２次の単純な方程式とグラフの関係、関数の概念、簡単な文字式の変換など算数やごく初歩の数学も高いハードルとなる。しかし受講生のつまづく箇所ではそこまで遡って辿り直してやることを毎週繰り返すことで､｢わかる｣ことの喜びに目覚め始めた。また多くの受講生の質問内容が後半、日を追って良い質問が増え、高度になっていくのがはっきりと実感できた。				
今後の課題	手間はかかるが、一人一人の質問に回答すれば、少なくとも自分の質問への回答は読むことがアクセス解析から窺われる。最初は半信半疑でも自分の幼稚な質問にも丁寧に分かるように答えてくれる、ということを幾度か経験すると、受講生の多くが次第に質問を考えること自体に能動的になってくる。そこまでもっていくのに指導側の根気と時間が必要だが、教員側も「こんなところでつまづいていたのか！」という思わぬ発見がある。これは半期１度のアンケートでは絶対に見えなかった。残念ながら私もこの方式は力量と時間の制約で年に２～３科目しか続けられない。全教員が年に１科目だけこの方式を取り、数年に１度ずつ担当科目すべてを点検できればと思う。				

授業形態	講義	科目名	統計学	必選区分	選択
開講学科・学年	大情２年		受講者数	約 70 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み				
	☑ 意欲・関心を高める取組み				
	☑ 発言を促す取組み				
	□ 時間外学習を促す取組み				
	☑ 学習態度を良くする取組み				
	□ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	講義・例題説明の後、授業時間内で解答できる練習問題を２題解いて貰う。隣の席の学生と必ず答え合わせをする。違う場合は、問題点を探し出し正解にたどり着くよう話し合う。いろいろな学生と話をして貰うために座席替えを３回実施している。 ２題の練習問題以外におまけ問題を宿題としている。おまけ問題は、各自が問題を作成し、模範解答も記すものである。授業時間内に取り組めるときは、問題の視点や面白さについて座席付近の学生同士で議論して貰う。				
取組みの効果	練習問題で答え合わせをすることで学生間のコミュニケーションがとれるようになる（問題の解説や考え方の説明ができる）。自分で問題を作成して模範解答を記するためには、解析方法の内容を十分理解していないとできない。この方法をとるようになって、テストの平均点が有意に上がった。				
今後の課題	練習問題や解説のための例題に学生が興味を持つ内容にしていく。				

授業形態	演習	科目名	総合演習Ⅰ	必選区分	必修
開講学科・学年	大情２年		受講者数	20 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み				
	☑ 意欲・関心を高める取組み				
	□ 発言を促す取組み				
	☑ 時間外学習を促す取組み				
	□ 学習態度を良くする取組み				
	☑ その他（学生と地域の交流をはかる取組み ）				
どのような方法を取り入れたか	学生と、外部の世間（企業・地域・社会）とのもっとも身近な接点として、コンビニ（コンビニエンス・ストアチェーン）というインタフェイスを取り上げる。ちなみに、この教材を学生用向けに適用する今回の授業に先立ち、藤本は、コンビニ学というテーマで、ここ十数年にわたって、中食（なかしょく）・嗜好品・ソト向きの視線・関与シールド・ディスコミュニケーション・タイムシフト・ビッグデータといった観点から、食文化・メディア論・マーケティング・社会調査・都市計画等の領域において、調査研究・論文発表を続けてきてきた（成果として「藤本助教授のコンビニ学①②③」『朝日新聞』2005、「コンビニ -- 人見知りどうしが集う給水所」『無印都市の社会学』法律文化社 2013）。これらの研究成果のうち、学生にとって取り組みが比較的容易なマーケティング・社会調査にしぼって、なおかつ、実際に店舗と地域を訪問するフィールドワークの手法を採用した。				
取組みの効果	①ユーザーとして毎日利用するコンビニを学問対象として見ることによって、それまで机上の座学でしか知り得なかった、商品・流通・マーケティングなど、経済現象に対する理解度が深まった。 ②「コンビニの謎」を、商品・店舗（棚と島の構成）・店員（サービス）・立地（地域特性）の面から、自分で問題発見して、探求・解決するスタイルを取ったことで、意欲・関心が高まった。 ③授業時間だけでなく、授業時間外に課したコンビニの実地調査についても、日々、自分たちから進んで客として調査者として通いつめることで、授業時間に倍する学習を引き出すことができた。 ④店員と実際に会話し、インタビューすることで、生きた地域経済の最先端であるコンビニ店舗を通じて、交流を深めることができた。				
今後の課題	具体的には、当初「コンビニ探偵学」というキャッチフレーズによって、学生の関心を引きつけようとしたが、すでに学生のあいだでは、探偵や刑事といった捜査に関する知識が減退していることがわかった。鑑取り・地取りといった彼らにとっては半ば死語化した用語で、フィールドワークの魅力を実感させることは難しく、さらに別のより身近なキャッチフレーズを、学生に向けて呈示する必要性を痛感している。				

授業形態	演習	科目名	総合演習Ⅰ	必選区分	必修
開講学科・学年	大情２年		受講者数	約 20 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☐ 理解を深める取組み ☑ 意欲・関心を高める取組み ☐ 発言を促す取組み ☐ 時間外学習を促す取組み ☐ 学習態度を良くする取組み ☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	PBL 教育。課題（協賛企業が抱えている問題）に対して、学生がグループワークを通して、それを主体的に解決していくというスタイルで授業を進めている。 本年の事例を紹介すると、 初回の授業において、協賛企業（ユニバーサルスタジオジャパンのオフィシャルホテルの一つ）から、学生に対し、自社の置かれたマーケティング環境、そしてそこでの課題を提示してもらう。補足であるが、その内容に関しては、事前に協賛企業と入念な打ち合わせをしている。 ２回目からの授業では、その課題解決に向けてのマーケティング戦略の提案をグループワーク（１チーム４人）で行っていく。各回の授業では、「ホテル利用における消費者満足」「競合企業とのポジショニング」などの課題を学生に与え、それを翌週にチームごとにプレゼンし、教員がコメントしていくという形で進めている。 最終授業においては、協賛企業の方も再び授業に参加し、学生の最終プレゼンで最も説得力のある提案をしたチームを発表してもらうコンペ形式にしている。				
取組みの効果	社会との関わりおよびグループワーク（チームで意見を出し合い、分担して課題を仕上げる共同作業力）の重要性を認識できることである。 また、学生は自分たちの提案に対する企業サイドからの評価の有り様に大きな刺激を受けていることが多く、実務的にいかなる考え方が社会で求められているかを知る非常によい機会になっている。				
今後の課題	課題内容を学生の身近な問題にできる限り近づけていくこと。 協賛企業を安定して探してくること。				

授業形態	演習	科目名	ウェブコンピューティング	必選区分	選択
開講学科・学年	大情２年		受講者数	約 80 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み				
	☐ 意欲・関心を高める取組み				
	☐ 発言を促す取組み				
	☐ 時間外学習を促す取組み				
	☐ 学習態度を良くする取組み				
	☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	授業の流れとして、小テスト→前回の復習（演習課題）→座学→今回の演習（前方での実演＆各自で手を動かして確認）という手順を導入した。 小テストは多肢選択問題を中心とする１０問で、手書きのノートのみ持ち込み可とし、評点のうち５０点をここから与える（各回５０点満点なので、平均点を評点とする）ことを明示した上で授業開始時に１５分程度で実施。 前回の復習（課題）では、ウェブページの完成形を画像で与え、同じ見た目になるよう HTML や CSS を記述させる。時間が１５～２０分程度と短いため、ウェブページのコンテンツはひな形テキストとして予め与える。 座学はウェブに関する内容で、１５分程度。小テストの問題のうち、半数はこの座学から出題する。座学からも小テスト問題を出題することで、単なる手習いの演習にならないよう意図した。 今回の演習（前方での実演）は、本来、課題演習の前置きとして演習内容をスライドで説明するだけだったが、課題演習を行う時間が取れなかったため、スライド説明をしながら各自で手を動かして動作を試してもらうというスタイルを取った。				
取組みの効果	小テストは、座学的知識の習得や、手書きノート作成による復習に役立っていると実感する。２つの演習（前回の復習と今回の演習）については、ただスライドの説明を聞いているよりはずっと身につくと考えられるが、ウェブコンピューティングへの興味の強さやコンピュータに対する得手・不得手の差が大きく（大情２年生がほぼ全員受講しているため）、どのレベルの学生に合わせて進行するか難しいところである。現状、不得手な学生のほうが声が大きく、手を挙げて質問してくるので進行が早過ぎるかと思わされるが、得意な学生は淡々と進めており、手持ち無沙汰にしている学生も見られる。				
今後の課題	本学に着任して本授業が初めての取り組みであり、現時点では、コンピュータに対する学生の習熟度や授業に対する興味（単位修得だけを目的とする学生がどの程度受講しているか）などを探りつつの授業となっている。毎回少しずつ改善策を導入しているが、授業内容のレベルの調整も含めて３年間は改善を繰り返すことになると考えている。分量と難易度のベースラインが定まれば､不得手な学生に全体の進行を合わせ、得意な学生や興味の強い学生には発展的な課題を用意するというスタイルで落ち着くと予想している。				

授業形態	演習	科目名	メディア編集演習	必選区分	選択
開講学科・学年	大情３年			受講者数	約 30 名
最も力を入れた取り組みポイント	☐ 理解を深める取組み				
	☐ 意欲・関心を高める取組み				
	☑ 発言を促す取組み				
	☑ 時間外学習を促す取組み				
	☐ 学習態度を良くする取組み				
	☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	毎回課題を出して、その課題についての学生のプレゼンテーションを中心にディスカッションを行う。誰が発表者になるか事前に決めないため、全員が課題について時間外にリサーチをして、自分の考えをまとめる等万全に準備をしておかないと授業に参加しづらくなる。 ディスカッションでは、「すごいと思いました」等のコメントは禁止し、感情と論理的な議論の区別をするように徹底して指導。●●な視点から、問題があるとすれば、今の発表で触れられていないが注目すべきことは…などと論点を明確にすることによって、次第に学生たちが論理的にディスカッションを行えるようにファシリテートをした。 授業の後半 30 分間で各自ノートを作成してもらい、自分自身でふりかえりを行うことを習慣づけた。ノートは毎週コメントをつけて返却し、そこに書かれていることについて次週取り上げるようにした。				
取組みの効果	学生たちの積極的な参加と、時間外学習の習慣化。履修した学生たちからは「このような発言するのが当たり前という授業ははじめてだったので大変だったが、常に発言することで、いつも考えるということができた」「人前で発言することに対してのハードルが下がった」「事前準備をする意味がわかった」などのコメントが寄せられた。				
今後の課題	履修する学生グループの意欲や規模に左右されるところが大きい。履修意欲の低い学生グループがあるとディスカッションの質がどうしても低下しがちになる。 これまでの経験で、初回授業の際に、かなり具体的に厳しく授業内容を説明し、初回授業後に課題をだすことで、ある程度学生の履修意欲の統一化をはかることができている。このあたりはこの授業だけではなく、本学の標準時間割のよくない面がでているように考える。３年次４年次については標準時間割ではなく、学生個人が意識的に履修科目を選ぶようにする方がよいと思う。				